

同一原文に対する複数の翻訳の対照基準：
上級作文教材作成と日中パラレルコーパスの活用

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Otaki, Sachiko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/17341

同一原文に対する複数の翻訳の対照基準 ー上級作文教材作成と日中パラレルコーパスの活用ー

大瀧幸子 金沢大学

ohtakis@kenroku.kanazawa-u.ac.jp

1. はじめに

外国語教育における初級教材から中級教材までの教育内容に関しては、正規の学校教育内で行われるスクールグラマーの画一化をはかる試みのなかで、通常、ほぼ一致した見解が成立している。日本における中国語教育に関しては、以下の学会や民間団体（HPは現在住所）がそれぞれ試案作成を行ったことがある。

日本中国語教育学会：<http://www.jacle.org/>

高校学校中国語教育研究会：<http://www.kochuken.org/>

（財団法人）国際文化フォーラム：<http://www.tjf.or.jp/jp/>

日本中国語検定協会：<http://www.chuken.gr.jp/>

しかしながら、中国語も例外ではないが、外国語教育において中級レベル修了とみなされる学習者、すなわち「日常生活に不自由しないコミュニケーション能力」を有し、「特定の専門領域に関する文書を辞書なしでほぼ理解できる読解能力」を備えた学習者を更に教室で鍛えようとする上級外国語教育の模索は皆無といってよいほど、なされてこなかった。どの国の外国語教育においても一挙に、「職業通訳の養成」「商業通信文の習熟」等の、外国語能力を駆使して働こうとする人々を養成する職業訓練に特化した民間教育へと飛躍し、教室での教育は放棄されてきた。

本稿は、このような実技トレーニング以外に上級外国語教育という教育分野が厳然として存在する余地があると主張する。そして、（１）そのための教材開発が「第二言語習得理論（SLA）」¹を

¹ ロッド・エリス（金子朝子訳）1996:『第二言語習得序説 学習者言語の研究』研究社 1996,原著 The Study of Second Language Acquisition, SLA 研究は学際的研究領域として言語学・社会学・心理学・教育学の各視点にたったアプローチが行われている。本稿では言語学（特に語用論、テキスト分析）の立場から考察を行う。

参考として行われる必要がある、(2) 上級作文教材用の正文資料は翻訳分析を介して作成するのが効果的である、という立場から、幾つかの提言と実践例を示すことを目的とする。

2. 上級外国語教育と第二言語習得理論 (SLA)

言語教育を行う教師と教育環境は、[表 1] に示すように、八種類に整理できる。(C類は通常外国語教師の範疇に含まれない。)

[表 1]

- A 自分の母語を学習者（母語を異にする）に教える教員
 - A 1 自分の母国（第二言語学習にとっては現地）で教える
 - A 1 + 翻訳法 学習者の母語を理解する教員
例：日本の留学生センターの日本人日本語教師
中国の留学生センターの中国人中国語教師
 - A 1 + 直接法 学習者の母語を理解しない教員
例：日本の留学生センターの日本人国語教師
中国の留学生センターの中国人漢語教師
 - A 2 学習者の母国（教師にとっての外地）で教える
 - A 2 + 翻訳法 学習者の母語を理解する教員
例：中国に派遣された日本人日本語教師
日本に派遣された中国人中国語教師
 - A 2 + 直接法 学習者の母語を理解しない教員
例：中国に派遣された日本人国語教師
日本に派遣された中国人漢語教師
- B 自分の第二言語を学習者（母語を同じくする）に教える教員
通常すべて翻訳法を利用する。
 - B 1 学習者と自分にとっての母国（第二言語学習にとっては外地）で教える（一般の教室教育の環境）
例：日本の専門学部の日本人中国語教師
中国の専門学部の中国人日本語教師
 - B 2 学習者と自分にとっての外地（第二言語学習にとっては現地）で教える
例：中国での日本商社の日本人中国語教師

日本での中国商社の中国人日本語教師
C 自分の母語を学習者（母語を同じくする）に教える教員
直接法を利用する。

C 1 学習者と自分にとっての母国で教える

C 2 学習者と自分にとっての外地で教える

例：中国での日本人学校の日本人国語教師

日本での中華学校の中国人漢語教師

凡例：翻訳法：学習者の母語への訳語を利用する言語教育

この教育方法をとる教師を日本語教師、中国語教師とする。

直接法：教育対象とする言語のみを使用する言語教育

この教育方法をとる教師を国語教師、漢語教師とする。

これらの言語教育者の個人的条件と教育環境は、言語教育の効果
をあげるために、おのおの有利な点と不利な点を与えている。
自分の母語しか知らない教師は、母語を客観視しにくく、外国人
学習者がいつも戸惑う点についてその理由をつかみにくい。しかし、
生粋の母語話者としての語感が損なわれる危険性は少ない。
学習者の母語を知る教師は安直に翻訳法に頼り、学習者ともども
会話や作文など output への努力を怠りやすい。しかし、経験上、
学習者の不得手な学習項目を効率よく教えられる可能性もある。
自分の母国で自分の第二言語を教える教師は（1）教師自身が母
語話者ではないため、言語習得過程が当初から人工的なものである。
（2）学習者に場面に応じた語用論的差異を体験させにくい。

（3）ネイティブスピーカーからの語感や内省報告を手軽に得ら
れない。という、言語教育者としての三重苦を背負う。しかし、
その弱点をばねとして研究活動への関心が深くなる傾向もある。
一方、自分の母国で自分の母語を教える教師は、学習者に豊富な
生活体験を教室外で与える機会をもち、かつ良心的なネイティブ
チェックも行える、言語教師として最も有利な条件をもっている。

しかし、どの立場から、どの環境において、言語教育に携わる
場合も、言語教師は学習者のレベルごとに教育目的を設定し、達
成目標を果たすために、自らの有利な点（時に不利な点さえも）

を活用せねばならない。

このように言語教育におけるさまざまに異なる条件を勘案しても、なお、本稿は上級外国語教育として達成すべき統一目標を教室教育に設定するべきだと考える。なぜならば、教育現場に緊張感が漂うこと自体が、当該科目に関わる研究分野での教師と学習者の問題意識を高め、研究と教育が連携していくという大学教育の本来のあり方を実現しうるからである。以下、外国語教育を関連研究分野の研究と関連つけるため、初級外国語教育からの達成目標を順を追って議論し、上級外国語教育の到達目標を提案する。

初級・基礎レベルにある学習者に対しては、言語運用能力のうち、発音、ヒアリング、場面に応じたスピーキング、単文の作文を習得させることが各国の学校教育での目的とされている。したがって、授業設計や教授法の研究においては「暗記・反復・入れ替え練習」という直接法の手法が正確さ系 (accuracy) の教室活動でも中心となり、なめらかさ系 (fluency) の追及でも「典型的な場面設定」「役割別表現練習 (RolePlay)」²などが主流となる。この段階では、シャワーの如く自然に言葉を input すると同時に学習者に負担を感じさせない練習をさせられる点で、自らの母語を教える教師が圧倒的に優れた教育効果を挙げられる。ただ現在では、成人の初学者のために、特に文法に関する母語別教材（例えば、中国人向け日本語教材、日本人向け中国語教材）により、二言語間の異同を理性的に自覚させ、効率的な習得をはかる試みも盛んになりつつある。この教材編纂に関しては、自らの第二言語を教える教師にも学習経験に基づいた貢献ができる余地がある。

次に、一定数の基礎語彙習得が完了し、基礎的な述語を中心とする文型を理解した中級レベルの学習者に対しては、直接法を利用する教師と、翻訳法を利用する教師とで教授法の重点が異なってくる。前者は多くの場合、現地到着後の留学生教育に用いられ

² 日本語教育学会 1990『日本語教育ハンドブック』大修館書店；
第二章「外国語教育としての日本語教育」IVカリキュラム

る手法であり、現在では、複数の学習者に共通の作文課題を与えて相互に討論しつつ作文作成を行わせる「ピア・レスポンス」³の開発が進んでいる。これは討論に参加する学習者の母語が共通である場合には、現地での生活体験を背景として自己と他者による推敲を介して学習者の発想の豊かさを促進するという、言葉の input と output のバランスを助長する特長がある。そのほか、ディスカッション科目、自由会話科目に関するカリキュラム設計も、同様の効果を目指すものといえる。ただし、これら直接法の手法は、ライティング（発話を含む）評価基準の策定に携わる十分な能力をもつ「母語を教える教師」のみが、効果的な注意(attention)を加えることにより教育効果をあげることができる。また、学習者レベルとしては、語用面での正確さを内省でき、推敲能力のついた段階にはいった時に中級段階を習得したと評価すべきである。

後者の翻訳法の手法は通常、辞書を使いこなせるほどの母語の知識をもつ学習者に対して行われる「多読方式」が主流であり、教師が学習者の母語を使わずに、文章の意味を直接法で言い換えて説明していく場合でも、学習者側には辞書を介して翻訳法が関与してくる。翻訳法をとる限り、自分の母語を教える教師も、自分にとっての第二言語を教える教師も、原則としては同等の教育効果をあげるのが中級段階の教育であろう。ただし、教師が学習者の母語を理解しない場合、感想文や評論をかなり長く書かせる writing を経なければ学習者の理解度を評価できない、という難点がある。通常、理解能力とは表現能力は後者の能力のほうが発達が遅れるのは周知のことであり、中級教育に対して正確さを追及するには、バイリンガルの教師の存在が不可欠となってくる。

3 池田玲子 2004 「日本語学習における学習者同士の相互助言（ピア・レスポンス）」『日本語学』23.1 pp36-50

田中信之 2005 「推敲に関する講義が推敲結果に及ぼす効果」
『日本語教育』124 pp53-62

Yang, M. & Badger, R. & Yu, Z. 2006 A comparative of peer and teacher feedback in a Chinese EFL writing class.
Journal of second language writing, 15(3), pp179-200

さて、以上の外国語教育に関する段階設定の流れからいえば、いわゆる上級外国語教育の到達目標は簡単明瞭なものにみえる。

「第二言語として習得した言語ではあるが、当該言語の母語話者と区別のつかない運用ができるようになること」

しかし、この到達目標に関しては、従来から「もともと達成不可能」と疑う議論があつたを絶たず、本稿が考察する「厳然として存在すべき上級外国語教育」も、この到達目標をそのまま受け入れるものではない。達成不可能という議論を誘発してきた、確答の出ていない言語理論上の問題点は主に3点ある、と考えられる。

(1) 所謂「プラトンの問題」(人間は、言い間違いや不完全な文さえ含むような有限個の言語データしか与えられていないにも拘わらず、いかにして無際限に多くの新しい文を発話したり理解したりすることができるのか)をチョムスキーがとりあげた後⁴、第二言語習得に関しては衆目の一致する正解が提出されていない。人間に生来の言語獲得装置(LAD)があると仮定して、なぜ第二言語習得時にはかくも多くの時間が必要なのか? 一方、幼児は劣悪な学習環境にありながら、なぜ聞いたこともないはずの正文を、かくも短時間で使えるようになるのか?

(2) 12歳を超えた時期から、人間には一般問題解決能力の著しい発達がみられる。この発達は幼児期にあった生来の言語習得能力と競合している可能性が大きいというデータが多く報告されている。更にまた、競合の始まる臨界期の特定は不問に問うとしても、成人学習者が早期学習者よりも習得に時間を必要とすることは周知の事実である。⁵なぜ、言語習得能力と一般認知能力の間にかい離が生じ、かつ競合関係が生じてくるのか?

(3) 人間は言語を生来の言語能力によるのではなく、社会的存在として一般的認知能力に依り言語を習得すると仮定すると、二次的に学習していく言語と母語の間には、いつまでも運用面(語用論)の領域で「中間言語」状態が残存する可能性が大きいと推

⁴ Chomsky, N. 1986. *Barriers* MIT Press (刺激の貧困性の指摘)

⁵ 白畑知彦. 2006『第二言語習得における束縛原理—その利用可能性—』くろしお出版

測される。しかも学習者の母語に関係なく、特定の言語を第二言語学習する時には特定の「習得困難な知識」が残るのはなぜか？

この3点の未解決の問題は、学習者に対して意識的言語学習が促されている外国語習得過程と、学習者が相互作用(Interaction)を介して無意識に学習していく母語習得過程との間に、深い断絶があることを示している。外国語教育にあたる言語教師も自覚的に理論学習を行い、自らの教育の方略(strategy)を検証していかねばならない。ただし、理論的な考察結果にある程度得心がいっただけでは、教育現場では「成人の第二言語学習者には多くの時間を反復練習に割かせよう」とか、「いかにも中国語らしい補語構造の表現に関しては細かい用法の説明を繰り返そう」という方略しかたてられない。これら技術的解決は、経験値からでも考案できる中級レベル学習者を対象とした教育方法といえる。外国語教師はSLA研究を学ぶことで、むしろ現段階で解決困難とされる課題を用心深く避け、しかも、当該言語の母語話者が行う言語運用により近い言語運用を習得させられるような、上級外国語教材を考案していくことが肝要であろう。

そこで本稿では、上級外国語教育を、「学習者の作文能力の向上」のみを目標として行うWriting教育に絞り込むことを提案する。なぜなら、長文の作文教育は外国語教育（一般の言語教育においてもいえることだが）において、知識のinputがほぼ完了した最終段階でのみ実施できる、語用論と語彙・語法の総合的訓練だからである。すなわち、学習者に母語における思索の流れと第二言語における主題選択などの異同を、意味的まとまりを持った文脈（以下「テキスト」と呼ぶ）構成を考えるなかで再認識させ、同時に教師からの誤用訂正を通して「outputによる知識の固定」を促す。また、テキストの作成目的に合致した文体の統一と修辞の訓練も、語用面でなく抽象的思考に適した概念操作能力を鍛える。

作文教育が抱える欠陥は、たとえ作文テーマに「感謝状、依頼状」などの語用論的制限をつけたとしても、コミュニケーションの相手が現場に存在しない以上、ポライトネスの方策等に関する訓練を課すことができないことである。しかし、もともと第二言

語学習者にとって最後まで残る「母語話者と同等になり得ない中間言語状態」は、多様な生活場面での言語運用能力に残るとされている。本稿は、上級外国語教育の到達目標として口頭コミュニケーション能力向上を設定することは、多大な労力を費やしても教育効果があがりにくいゆえに、避けておくべき課題だと考える。

3. 上級作文教材とパラレルコーパス

本稿が意図する上級作文教材の作成には、[表1]で分類した言語教師のうち、バイリンガルの教師と単一言語の教師とが共同で携わることが望ましい。バイリンガルという言語能力そのものの解明が現在すすみつつあるが、本稿の扱う上級作文教材は直接的にバイリンガル養成を目的としてはいない。この教材を利用して達成しようとする具体的な教育目標は次の2点である。

- (1) 学習者に長文を書かせて誤用箇所を指摘し、その誤用の原因をテキストの意味分析をもとに説明することにより、学習者に当該言語の話者にふさわしい「思索の表現」を習得させる。
- (2) 書面語としての文体ランク別に、修辭的統一を習得させる。

まず、学習者に長文をかかせるためには多くの正文をinputさせねばならないが、本稿では、学習者がすでに中級教育の段階で多読により、さまざまな種類の文体を読解、聴解できるようになっているものと想定して、上級作文教材の編纂方法を考えていく。

この教材編纂活動に有益な理論的根拠を提供する研究分野は、テキスト分析における「比較対照研究」理論であると考えられる。特に上級教材として、誤用の原因を説明してみせるためには、比較研究が不可欠である。ところが、比較研究は従来ややもすれば、バイリンガル研究者の「個人言語の語感」をそのまま誤用を認定する判断基準とする論考が多く、単一言語の研究者の立場からは曖昧、恣意的な立論だと秘かに、時に公に蔑視されてきたといっても過言ではない。

本稿では比較研究の厳密さを保証するために、原文と翻訳文のパラレルコーパス（以下「PK」と略称する）をテキスト分析の対象とすることを提案する。そのPKの構成は、原文1に対し、

複数の翻訳を備えていなければならない。原文と翻訳が1対1でしか備えていない正文PKは、バイリンガルの個人言語を一例挙げたのと同等の情報量を提示するにすぎないが、複数の翻訳つまり「翻訳可能性」を示すPKは、学習者の第二言語（または母語）における文脈が、その母語（または第二言語）が表している幅のある思考内容をどこまで表現できるか、過不足はないか、という意味的許容量を提示している。本稿では、この意味的許容量の実態を分析することを目標として、テキストの意味分析を試み、その意味分析の記述方法として「階層意味論」を採用することにする。以下、階層意味論の学問的背景を紹介し、テキストを分析対象とする方法を検討する。

記述言語学は当初、言葉の意味を研究対象とすることを拒否してきたが、生成文法によるさまざまな普遍文法の追及と、そのモジュール的言語観に対抗する認知言語学の隆盛は意味に関する記述的研究をも言語学のなかに定着させた。日本では、服部四郎により創案された意義素論が単語、フレーズ単位の語義を単一言語内の意義素体系を構成するものとした。その手法を発展させた国広哲弥は意義素の多義構造⁶を「複数の意味的語義特徴によるネットワーク」として記述し、認知言語学と近似する現象素論⁷を提案した。また、単文の意味については、南不二男らが命題内述語構造の4階層ABCD⁸の存在を指摘し、かつ益岡隆志らも伝統的な命題とモダリティの区別を発展させた⁹。認知言語学の一派でもある構文文法¹⁰は文の意味を単位とする相互関係「構文ネットワーク」を提唱し、中右実も認知言語学内で成層意味論を開発した¹¹。

さて上記の如く、単文の意味を様々な角度から「階層と呼応関

6 大滝幸子 2006「日本語語義研究的回顧と展望 2」《言語学与应用语言学 研究NO2》中国社会科学出版社

7 国広哲也 1994「認知的多義論—現象素の提唱」『言語研究』pp22-43

8 南不二男 1993『現代日本語文法の輪郭』大修館書店

9 森山卓郎、仁田義雄、工藤浩 2000『モダリティ』岩波出版

10 A.E.Goldberg 1995 *Constructions-Construction-Approach-Structure-Cognitive* 『構文文法』 研究社出版 2001（河上誓作ほか訳）

11 中右実 1994『認知意味論の原理』大修館書店

係をなす意味構造」と定義する文法研究の潮流においては、複文の意味をも階層構造として研究することで理論的一貫性を保つ必要があり、実際、複文に関する研究もこの方向で進められている¹²。

ところが、単文（複文を含む）を連結した言語単位としてのテキスト構造は、未だ意味研究の対象として十分に注目されず¹³、本格的な研究は「談話分析」の名を冠して、わずかに田窪行則や金水敏の談話管理モデルなどが提案されている¹⁴にすぎない。その研究の滞りは、接続論理や超文法成分の呼応など、「単文を分析単位としていた時には存在しなかった意味的要素」に対する汎用性を備えたアプローチや分析方法が未だ存在しないことによって生じている。

テキストの意味分析に対する、階層意味論以外の言語理論の研究状況を概観してみても、生成文法は現在のところ、話し手（書き手）の主観による接続表現を分析する方策を公表せず、認知言語学も分析対象が単文にとどまって久しく、管見の限りではテキストを対象とした本格的意味論究¹⁵は未だ上梓されていない。

このように、テキストに対する意味分析方法が確立していないため、筆者は拙著で使用してきた文の意味的階層を区別する概念¹⁶を援用しつつ、テキストの意味を階層的に捉えることを試みる。拙著で使用してきた4段階の表現水準を区別する観点にたてば、一言語のテキストにおいて既に複数の意味的階層を認めている以上、他の言語のテキストへと翻訳した文の正文判定にあたって「複数の翻訳可能性が存在する」ことを理論的前提として認めることになる。また、単文段階で文の意味に4階層を認めているの

12 益岡隆志 1997『複文』くろしお出版

13 長田久男 1995『国語文章論』和泉書院

14 田窪行則・金水敏 2000「複数の心的領域における談話管理」
坂原茂編『認知言語学の発展』ひつじ書房
野田尚史ほか 2002『複文と談話』岩波書店

15 「語用論」は後述する「知識ベース」を対象とする研究であり、言語形式そのものを考察対象とした研究とはみなせない。

16 大滝幸子 2005「命令表現内における文法構造の役割分担」『金沢大学中国語学中国文学研究室紀要』第8輯 pp1-22, 表現水準の定義

で、テキストの意味としても同一言語において4階層が存在するほか、テキストの表現水準に独特の意味内容として「接続論理」が加わってくる。それらを翻訳していく場合には、別の言語においても4階層の意味を存在するとする以上、 4^2 の意味が理論的には存在しうると考えられる。現実には語義体系内のブランクや接続論理の欠如などで16種類の訳文が揃うことは皆無に等しいと予想されるが、少なくとも、十指にあまる翻訳が「正解範囲に存在しうる」と考えてよいことになる。

実例も容易にみつかるとは。魯迅『故郷』や『阿Q正伝』に対して多くの翻訳が公表されていること、その翻訳者はすべて高名な中国文学者であることや、老舍『駱駝の祥子』にも四種類の翻訳が現在も入手可能なことである。特に『故郷』に関しては、中国と日本で盗人がルントーであるかないかで正反対の学校教育が行われていることが指摘され、文脈解釈が異なる好例となっている¹⁷。また、夏目漱石『ぼっちゃん』や、川端康成『雪国』に対して、三種類ずつ中国語翻訳が存在することは、言語研究用コーパスとして利用者が多いCJCSに採用されているため、広く知られている。

それでは、翻訳としての正解は唯一つではないことが理論的に整合性のある予測であり、現実にも複数解が公認されているとして、「正解と誤訳の境界線」は何を基準に、どのように判定または測定すべきであろうか？

例えば、孤立語の代表的言語である中国語と、膠着語の代表である日本語とでは、接続形式の数に大きな開きがある。接続概念の言語形式化が進んでいる日本語に対して、中国語は時に同一形式（“而”など）がテキスト内文脈の差異に応じて順接逆接を表し分けられるほど、叙述内容の論理的関係は文脈依存度が高い。このような場合、同一原文にとって、どのテキストが正訳であるかを判定する形式的基準をどこに見出すことができるだろうか？

通常の類義語判定や、単文レベルでの正文判定で実践的に利用

¹⁷ 藤井省三 1997『魯迅「故郷」の読書史』創文社

される判定基準（１）リトマス形式を設定したうえで、その形式との共起制限の有無による判定（２）言い換え、変換の可否による判定、などを判定基準として援用しようとしても効果はない。文の意味分析からテキストの意味分析へと、分析対象を拡大していく場合、まず最初に考案すべき意味分析のツールは、接続論理が適切に翻訳されているかどうかを判定する基準といえよう。

事実、現行の自動翻訳システムの構築に関して、実践的成果をあげつつある自然科学系文書、文書スタイルの固定した申請書などのテキスト（以下「パターンテキスト」と呼ぶ）は、接続論理については単純明快な接続詞、接続助詞しか使用しない。したがって、パターンテキストの自動翻訳がほぼ成功するのは、「接続論理の判定基準をたてなくても翻訳に支障が生じない」ためと考えられ、このことは判定基準が重要であることを裏付けてもいる。

更にまた、これらパターンテキストでは、人間の感情や話し手の主観的判断を表すモード系の表現を必要としないゆえに、意味的な階層性の二大区別も微小だとみなせる。中国語文法で用いられる概念用語、いわゆる実詞と虚詞の区別のうち、実詞については外界に共通知識を見出しやすいのに対し、虚詞を使用するモード系表現は話し手が発話場面（または書記場面）発話時刻（または書記時刻）で下す主観的判断を表現するため、虚詞を利用するテキストでは「言語による意味伝達を成功させるために、必要とされる一定の共有知識と共有情報（以下「知識ベース¹⁸Knowledge Base」と呼ぶ）」を必要とする。虚詞の使用率の低いパターンテキストは、作成目的も書記場面の情報も制限されているために、この知識ベースの構成も単純な想定ですませることができる。

この知識ベースに蓄積され、かつ知識ベースから引き出され利

18 中国語では「知識庫」。機会翻訳システムにより内容や構成は異なるが、一般的には「知識表現、知識利用（推論）、知識獲得」の三方面の情報を蓄えて、翻訳遂行を支える。例えば、北京大正語言知識処理研究院のHNC理論では「概念・語言・常識」の三種類の知識庫をそろえる。

詹卫东 2004 “面向自然语言处理的大规模语义知识库研究述要” 北京大学汉语语言学研究中心[语言学电子文件]

用される言語外情報（時に言語情報でもある）は、筆者の使用してきた表現水準のうち、最高位の具体的水準「発話者水準」で既に単文の意味内容にも取り込んである情報である。しかし、意味分析の対象をテキストへ拡大していくにあたり、この知識ベースの情報の必要性は、質量ともに格段に大きくなる。その膨大な情報の整理と選別技術に関する理論構築が各研究機関で競われているが、なお、一般の随筆的文章や文学作品を見事に自動翻訳することは永遠に不可能ではないか、と疑われているのが現状である。

このように、意味分析の対象を単文からテキストへ拡大することによって、意味の階層分析にあらたに（1）接続論理、（2）知識ベースに関する考察が必要となることを確認したところで、さらに、談話やテキストを作成できる上級外国語学習者が犯す誤りに関して、第二言語習得理論が指摘している特殊性についても、確認しておく必要がある。翻訳文が、その原文となる母語（または第二言語）が表している思考内容をどこまで表現できているか、その原文の意味的許容量と比べて超過したり、不足したりするメカニズムが、必ずその誤りに表れているはずだからである。

第二言語習得理論は当初、母語と第二言語との差異が大きければ大きいほど「母語からの干渉」によって第二言語の習得が遅れると仮定し、多くの検証実験を行った。しかし、誤りが母語干渉から生じるという結論よりも、「学習者の学習が進むにつれて発達させる中間言語（interlanguage）」において、「過度の一般化を行う推論の失敗」がより多くの誤りを引き起こすという結論が導き出された。中間言語の形成を促す原動力とみなされている推論能力が、人類特有の言語習得機能に基づくかどうかについては未だ確証が提出されていないが、上級学習者は初級・中級学習者が行わないような「推論の失敗」をすることは確認されている。教育現場での教師としての体験や個人的学習体験を振り返るならば、この推論方式¹⁹⁾にはやはり「母語からの転移」が生じやすい、と

19 坂原茂 1985『日常言語の推論』東京大学出版会

考えられる²⁰。ここでいう所謂母語からの転移とは、言語形式の用法に関する知識だけではなく、「社会構造や場面把握など意味の伝達に必要な情報をいかに捉えるか」という知識ベースからの影響も指しているのであり、多くの先行研究も同様の指摘をしている。

上級外国語学習者に以上のような特徴のある誤りを犯す傾向があるものとして、その推論の誤りを軽減する説明能力を高めるためにも、本稿では、PKを作成し、推論の飛躍を遮断する方法を比較研究によって探るのが効果的であると再度提案する。

PKには、その構成と用途を別にするものが2種類、存在する²¹。

(正文PK)

構成：原作1に対して、複数翻訳。

複数のプロの翻訳者による、原文テキスト1に相当する複数の翻訳を並列表示する。

(誤用PK) 別名；学習者PK²²

構成：母語作文1に対して、第二言語への翻訳1

上級学習者が表現しようとした意味内容を母語で書いたテキストと、それに対する翻訳を並列表示する。

正文PKは次の目的を果たすために、二通りの使い方をする。

(目的) 日本語(または中国語)から中国語(または日本語)へ翻訳する場合の、テキスト許容範囲の考察。

- 1：原文テキスト内のキーワード(主に接続形式)が翻訳でどのように訳されているか、または無視されているかを計量的に質的に(同一言語呼応語彙の検出)測る。
- 2：日本人中国語教師の手で中国語原文から日本語翻訳文

20 森山新 2000『認知と第二言語習得』新日本語学研究叢書 NO1, 韓国図書出版啓明, 第Ⅱ部第5章中間言語と母語の役割に関する分析

21 言語ごとの認知方式の違いや知識ベースの特徴を把握するために、同一言語の原文に対する翻訳言語の種類は多いほど資料的価値があがる。

22 既成の代表的コーパス：国立国語研究所「日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース」(略称：作文対訳DB)

に対して、中国人日本語教師の手で日本語原文から中国語翻訳文に対して、別の類義語が使用できないか、接続形式の位置の変更は可能か、どの翻訳を名訳だと思ふか、を判定する。

誤用PKは次の目的を果たすために、二通りの使い方をする。

(目的) 日本語(または中国語)から中国語(または日本語)へ翻訳する場合の、誤用例とその原因の抽出。

1: 翻訳文の当該言語としての破綻に対して誤用Tagを付加し、その誤用の出現を計量的に質的に(母語内での呼応語彙や対応文脈)測る。

2: 翻訳文が翻訳言語として明らかに不適切であった場合、複数の判定者の討論により、その原因を考察する。

誤用PKの最終用途としては、作成者を秘匿したうえで上級作文教材の素材として活用し、適切な解説を加えることが考えられる。そのためには二段階の作業が必要である。

(1) 第二言語としての書き間違いを抽出し、誤用tagを確定し、典型的誤用例を数量的に判定する。

(2) テキストの読み間違い(翻訳としての誤用)を考察して原文の意味内容の誤解、過不足、翻訳文における推論の飛躍を判定する。

現在、学習者Kに対する誤用原因の判断基準に関する問題点が先行研究の中でさまざまな角度から提出され、特に「正文としての判定基準の揺らぎ」²³については、研究協力者の間で事前に、より綿密な共通認識を確立しておかねばならない。そのためには時間がまだ必要だと思われる。

そこで、本稿では正文PKについての考察のみを、テキストの意味分析の具体例として一部紹介し、諸賢からご教示を賜りたい。

4. 日本語接続詞「そして、そこで、だから」と、中国語接続詞

²³ 宇佐美洋 2007 「学習者作文に対する教師コメントの分析—実態の把握・分析と、そこから得られる提言—」『作文データベースの多様な利用のために』国立国語研究所報告

「于是，所以，因为」のパラレルコーパスの例示

4-1. 考察対象とした正文PK

二種類の正文PKを使用した。

(A) 中日対訳コーパス；北京日本学研究中心2003年版
文学作品：中国23篇、日本22篇とその訳本合計105件
(ほぼ1130.3万字)。

文学以外：中国14篇、日本14篇、日中共同2篇とその訳
本合計45件(ほぼ574.6万字)。

そのうち、「雪国」「坊ちゃん」には3種の翻訳を採録。

(B) PLATEA GPS1 PatternSearchEngine：日中対訳版
中国当代文学作家39名120作品×日・中版
星新一52作品×日・中版
老舍 1作品×日本語版4種

GPSは2004年度科研費で発注したPK作成と検索用ソフト。

4-1. 日中各言語におけるシソーラス体系

まず、日中両国における代表的辞書とみなされている、日日辞典と、中中辞典を用いて、類義語の体系(シソーラス)を簡略に示しておく。(★は本稿での補足)

そして(★それから)	→そこで	→だから(だ+から)
前述の事柄を受け それに継続して、 あるいはその結果 生じる事柄を導く。	前述の事柄を受けて、 次の事柄を導く。	前に述べた事柄を 受けて、それを理由 として順当に起こる 内容を導く。
前述の内容を受けて、 さらに付け加える ことを表す。	話題をかえたり、 話題をもどしたり することを示す。	★話し手の主観を 前に述べたことで 正当化することを示す。

<大辞泉(小学館)におけるシソーラス素描>

○シソーラスを構成するキーワード(関連特徴)

前述(前に述べた)×3、事柄×2、内容×2、(★事柄と内容の違い?)
受けて×3 導く×3

○固有の表現(弁別特徴)

継続あるいは結果生じる 話題をかえる 理由として順当に起こる

于是 所以 因为

表示后一事紧接着 用在下半句表示 表示原因或

前一事，后一事 结果： 理由：

往往是前一事引起的。 用在上半句主语和
谓语之间，提出需要
说明原因的事情：

上半句先说明原因，

下半句用“是…所以…的”：

‘所以’单独成句表示

“原因就在这儿”：

〈现代汉语词典（商务印书馆）之中，近义词小组关键词素〉

原因×2（原因或理由？）〈原因〉は既成事実が成立した後で、
事情を遡及して分析する認知のあり方を示す概念と解釈する。

4-3. 日本人教師による日本語原文と日本語翻訳の検討例 中国人教師による中国語原文と中国語翻訳の検討例

本稿で紹介するPKの利用方法は、統計的手法での使用方法ではなく、パラレルコーパスの個性を活用する方法に重点をおく。

まず、PKそのものを第一次資料として、日本語（または中国語）の三接続詞が日本語（または中国語）の原文の位置を変えられる可能性があるかどうかを、調査し整理した。この調査結果は、それぞれの原文に対する母語話者の語感の幅と同時に「母語テキストに対する解釈許容量」をうかがわせるものである。

つぎに、翻訳が複数存在しないPKについては、日本人の中国語教師（または中国人の日本語教師）から、日本語で書かれた翻訳文（または中国語で書かれた翻訳文）に対する入れ替え可能性、および接続詞の位置変更に関する意見収集を行い、それを第二次資料として整理した。「異なる翻訳文の成立可能性」を示す資料作成により、(相当優秀な)バイリンガルが翻訳文を介して示す第二言語テキストの解釈許容量を図ると同時に、彼らの両言語テキストに対する共通解釈の幅を推測できる。

以下、紙幅の都合上、日本語接続詞「そこで」と中国語「所以」の第一次資料と第二次資料を、総合した形で例示する。

<そこで>左側：第一次資料（日本語分析）*****

***右側：第二次資料（中国語分析）

「そこで」日本語原作**第一次資料**、中国語翻訳**第二次資料**

- (1) 省略可能かどうか？→可能なら×
- (2) “所以”に置き換える場合、前の文脈に“因為”を入れることができるかどうか？入れられるとしたら、どこか？
- (3) “所以”“因此”の相互交換ができるかどうか？
“于是”と“然後”の相互交換ができるかどうか？

砂の女

825	<p>だが、現実はどうだろう？ 空からは死の棘が降り、地上でも、ありとあらゆる種類の死で、足の踏み場もない。性の方でも、うすうすは感じはじめているらしいのだ。どうやら、つかまされたのは、空手形だったらしいと。そこで<そして+3 × : だから+2 △△ : それで × : そのため+1 >、不服な性を相手の、回数券の偽造がはじまる。こいつはけっこう、いい商売になる。あるいは、精神的強姦が、必要悪として黙認される。</p>	<p>但是,现实究竟怎么样呢? 天空落下了死的荆棘,地上也是所有种类的死,连立脚的地方也没有。性方面稍许感到了一些。<因为>怎么象只能抓住空头支票似地<所以; 所以/因此; X+4 (自然な結果強調) 于是? 开始伪造起对手不服之“性”的预售票。这玩意儿可是个好买卖。或者,把精神性的强奸作为必要之恶,予以默认。</p>
11 46	<p>その針の踊りには、そこに地球の中心を感じさせるほどの、重みがあった。反復は、現在に彩色をほどし、その手触りを、確実なものにしてくれる。そこで<そして× : だから+2 △ : それで+1 : そのため△ : それから× : そうなる>男も負けずに、ことさら単調な手仕事にせいを出すことにした。天井裏の砂はらいや、米をふるいにかける仕事や、</p>	<p>那针的舞蹈很有份量,让人感到那里简直就象地球的中心。机械反复,现在涂上了彩色,把那手感当成确实的东西。<所以+4; 所以/因此; X于是>,男人也不落后,拼命干一些更单调的家务活。清扫清扫天花板上的沙子啦,淘淘米啦,外加洗衣服,都已经成了男人每天的必修课。</p>

洗濯などは、すでに男の主な日課になっ ている。	☆
----------------------------	---

青春の蹉跎

<p>358 とにかく今年のうちに司法試験に合格することだ。そこからおれの未来は開ける。そしてこの資本主義社会のなかに一つの足場を築くのだ。そこで<そして+3 : それから+1 : そうなる>と : そのとき : それから△> 始めておれの発言権が認められ、社会を動かす実力が備わってくる。この考え方は現実主義者だと言われる。しかし現実のなかで着実に生きた者だけが、本当に理想主義を説く資格があるのではないだろうか……。</p>	<p>总之今年要争取司法考试合格，<由此来开拓我的未来>。然后再来开拓我的前程。<而且>我要在资本主义社会中找到自己的立足点，<唯有在此基础上；这样+〈2〉 然后， 才有我的发言权， 才能具备指挥这个社会的实力。我这个想法也许被人称为实用主义。但只有在现实社会中踏实实生活下去的人才真有资格去谈论理想主义…。★★(X+1)</p>
<p>428 伯父の打算はわかっていた。伯父は末娘の康子を溺愛していた。彼女を手放してしまえば、三人の娘がみな居なくなつて、老夫婦だけが家に残る。その時の耐え難い淋しさを、伯父も伯母も予想していたに違いない。伯父はそこで<△ : だから+3 △ : そして× : そうなると : それで+1 : そのため△ : それから×> 異母弟の息子の賢一郎を康子の配偶者として想定した。</p>	<p><因为>伯父的心意是十分明白的。《因为+2》伯父溺爱最小的女儿康子，把她一撒手，三个女儿都走了，家里只剩下老两口，<因为+1>伯父伯母一定已预想到那时难忍的寂寞，<所以+5；于是因此>伯父决定把康子许配给异母弟的儿子贤一郎。◎</p>

日本列島改造論

<p>299 私はとくにこの点を強調しておきたい。七〇年代における産業政策の基本となる知識集約化は、産業の付加価値を高めることによって、脱公害、省力、省資源をめざすとともに、国</p>	<p>我要着重强调这点。使产业向充分运用人类智慧和知识的方向发展仍是七十年代产业政策的核心。它不仅要通过提高产业的新产值，达到避免公害、节约劳力、节约资源，</p>
--	--

<p>土や環境にたいする負担を軽くすることが大きなねらいになっている。したがって、知識集約度の高い内陸型工業の立地をどう展開するかは、これからの産業立地政策にとって非常に重要な課題となる。同時に、これらの知識集約的産業を支える土台ともいうべき基幹資源型産業の役割も軽視できない。そこで<そくなる>と：だから+3：そして△：したがって：つまり△：よって：というわけ>工業再配置が描く日本の新産業地図は工業の型によって二つに色分けされる。</p>	<p>而且还要减轻国土和环境的负担。<所以+1; X+1> 因此, 如何安排向充分运用智慧和知识方向发展的内陆工业布局, 将成为今后产业布局政策的非常重要的课题。同时不能轻视生产原材料的基干产业, 因为它是<(洪) 支撑词类知识密集型产业的基础>产业向充分运用智慧和知识方向发展的新兴产业的支柱。<所以+2; 这样; 为此; X>通过工业重新布局所体现的日本新产业地图, 按工业类型可分为两种。☆☆☆</p>
--	--

(凡例) 中国語原作の日本語訳より<そこで>を補充 “所以” に訳された例のみを本稿で示す。

日本語訳部分だけの検討検討項目：

(3) 接続表現に関してもっとふさわしい日本語訳があると考えられる場合、その改定訳を日本語原文のうえに書き込む。

<所以>を「そこで」と訳した例

<p>1037</p>	<p>///要知道, 如今老人问题, 简直是个世界性的社会问题。<因此+5>所以<X+1 (冷); 才+5 就>洪>派老同志来和鲍仁文同志合作, 一起完成这篇报告文学。事情很紧急, 今天, 鲍仁文就要跟他们进城去。要力争在三月以前完成, 让老同志带着稿子回报社发排, 三月一日见报。</p>	<p>///今や老人問題はまさに世界的な社会問題であることを、認識しなければいけない。そこで<だから+4：それで+1：よって：そのために：そして×したがって> 老同志を派遣し、鮑仁文同志と協力してこの報告文学を完全なものにすることになった。時は切迫しているから、鮑仁文は今日彼らと一緒に町に行かなければならない。なんとか三月以前に完成させ、胡さんに原稿を新聞社にもち帰ってもらって組みにまわし、三月一日号に掲載するのだ。</p>
-------------	--	--

(共通凡例) 表中の数字は、回答を記入した教師の人数である。
ご協力いただいた諸先生方に心より感謝いたします。

5. おわりに

— 複数の翻訳の対照基準設定に向けて—

正文PKをテキストの意味分析の考察資料として有効利用する工夫をについて、以上、簡略に紹介した。しかし、複数の翻訳の対照基準を設定しテキストの意味分析にとりかかる準備は、まだ始まったばかりである。その意味分析にめどがついたのちに編纂を始める上級外国語教育の作文教材の完成にいたるまでに、もうしばらく時間が必要である。

この『応用言語学研究論集』は北京師範大学と金沢大学の教員が協力して三年間にわたり推進してきた二か国間共同事業（中国教育部と日本学術振興会共催MOE）の一環として刊行してきた。

MOEメンバーは今後もこの研究論集を続けて刊行することと、PK作成を継続し、中間言語研究、外国語上級作文教材編纂を完成することを確認しあった。

本稿の論考も、今後の課題とする研究項目を列举し、後日公表できる成果をあげることを期して筆をおくこととする。

(1) 接続論理を表す言語形式のシソーラスを日中両国語で完成し、両者を比較することにより語彙的なブランクを確認する。

(2) 日中両国語の単文における4段階の表現水準が、どのように言語形式を用い、またどのように言外情報に依存して伝達されるのかを、PKを用いて確認する。

(3) PK内でシソーラスを構成する語彙を入れ替えることにより、テキストの文脈意味の情報量がどのように限定され、また必要とされるのかを分析する。

(4) 自由応答式で、接続論理を表す形式を検証しつつ、ドリルの作成を通して作文教材の骨格を設計する。

上記の研究計画が着実に、かつ順調にはこべる段階を踏んでいるかどうか、大方のご叱正を待つものである。

2008年12月吉日